

第2回0020童話賞

一般の部 「最優秀賞」 作品

「約束の宝物」

「じゃあ、おじいちゃん、おばあちゃん、おやすみなさい」

とまりにきていた息子一家が、それぞれの部屋に入った後、おじいさんと、おばあさんは、ソファーにこしかけて、今日一日の楽しかったことを語り合いました。

「今までの中で、今日が、一番楽しい誕生日じゃったよ」

熱いお茶をすすりながら、おじいさんが言いました。今日は、おじいさんの誕生日だったのです。

「長生きはするもんですねえ。あんなにかわいい孫たちに、祝ってもらえるなんて」

おばあさんは、まごたちが、いっしょうけんめい作った、紙のかざりを手に取って、目を細めました。

「ほらくして、話がとぎれるよ」と、おばあさんは、どっこいしょと腰を上げて、湯のみを片付け始めました。

「よて、わしも寝る支度をするかな」
おじいさんは、大きな伸びを一つして、おばあさんの後ろ姿をちらっと見ると、いそいそと、自分の部屋へ向かいました。

部屋へ入ると、おじいさんは、ふみ台を使って、一番背の高い本棚の上に、手をやりました。そして、手探りで、ちいさな鍵をさがし当てるど、その鍵で、机の一番上の引き出しを、開けました。引き出しの奥から出てきたのは、古ぼけた銀色の小箱でした。

おじいさんは、それをとりだすと、机の上に置いて

「今年は、開くよつなぎがするんじやが」と小声でつぶやきました。そして、震える

手で慎重に箱のふたに手をかけると、箱は、「トトリと音をたてて開きました。

息を殺してそつとふたをあけると……、中には、何も入っていませんでした。おじいさんは、不思議そうな顔をして、老眼鏡を別の物に取り替えました。小さな箱の隅から隅まで調べてみましたが、やはり何も入ってはいませんでした。

それがわかると、みるみるうちにおじいさんの顔がくもり

「だまされていたんだ」

といて、がっくりと肩を落としました。

おじいさんがそういったとたん、箱がカタンと動いて、しゅーっと煙が出てきました。

おじいさんが、とびあがって、いすから落ちると、煙のむこうから出てきたのは、いつかの小人でした。

「おうおう、いつかのおまえさんかね。また、会えるとは」

「元気だった？あれね、すいぶん、おじいさんになったなあ」

「おまえさんは、年というものを取らないのかい。あれから、もう何年たったかね」

「忘れちゃったよ。大昔のことだもの。それより、今、だまされた、っていったでしょ。だから、頭にきて出てきたんだ」

「おや、それじゃ、約束の宝物っておまえさんのことかね」

「ちがうよ。ほくは、プレゼントじゃないからね」

「あの時おまえさんは、『いっしょうけんめい歯みがきすれば、この箱を開けられる誕生日が来る』といったんじやよ。だから、わしはがんばったんじや。みてみなさい。この自慢の歯を」

そういって、おじいさんは、小人に向かって、イーツをしてみせました。

「うんうん、たしかにね」

「入歯の友達が多い中でわしは、ぜーんぶ自分の歯なんじやよ。いつもみんなにほめられ

るんじゃ。若く見えるし、元気がいいと。何
より、料理の味がちゃんどわかる」

「はいね」

「そうと。すごいじゃろ。これには、もの
すごく努力が必要だったんじゃ」

「本当に頑張ったんだね」

「それというのも、おまえさんが、幼い日の
わりに、この箱をくれたからじゃよ」

「あのころは、本当に、歯みがき嫌いだっ
たもんね」

「子供はみんな、歯みがきなんかきらいなん
じゃよ。面倒だし、眠いし。だけど、甘いも
のには目がない。だから、むし歯だらけだっ
たんじゃよ」

「本当だったね」

小人は思い出し笑いしました。

「おあさんによくしかられてたよね。それ
なのに、自分の子供や孫には、『しっかりみ
がきなさい！』なんて厳しく言ってる」

おじいさんは、顔を赤らめて頭をかきなが
ら

「自分がむし歯で苦労したからこそ、大切な
人たちには、そうなってほしくなかったんじ
ゃ。手でほっぺたを押さえて、一日中痛い痛
い、って泣いている姿を、もう見たくないん
じゃよ」

「それにしても、よくあれから、毎日みがく
ようになったね」

「毎日みがいたし、甘いものも、時間を決め
て、食べるようにしたんじゃ。さあさ、それ
より、例の物は」

すると、小人は、手を後ろに組んで、もじ
もじしはじめました。

「うーん、実はねえ。もう、あげたんだ」

「えっ、いま、なんてっ」

すると、小人は、思い切って、大きな声で
「もう、あげたんだ、箱の中身。だから、か
らっぽだったんだよ。おじいさん、もうもら
うつよ」

と言いました。おじいさんは、ぽかんとし

て、しばらく考え込みましたが、どうも、そ
んなことはないような気がしました。

「はて、わしは、もらっておらんよ」

「気付かないだけさ」

「どういことじゃ。わしはてっきり、箱の
中身は、宝石とか魔法の杖とかと思って、期
待してたんじゃ」

「そう、悪かったね。でもそれよりも多分
いものだと思うよ。じゃあね」

そういって、小人は、クルンと宙返りをし
て、ぱっと消えました。

おじいさんは、あわてて小人を探しまし
たが、もつどこにも見当たりません。おーい、
と小さな声でよんでみましたが、返事もあり
ませんでした。

おじいさんは、手に持った、からっぽの箱
を見ているうちに、だんだん腹が立ってきま
した。やはり、だまされたような気がしてな
りません。

そうになると、あんなに大切にしていた銀色
の箱も憎らしく思えてきました。長い間、小
人の話を信じて楽しみにしてきたのに。誕生
日にこの箱が開くかどうか試してみるのが、
一番の楽しみだったのに。

それなのに……。

おじいさんは、銀の小箱を、こみ箱へぱい
と、捨ててしまいました。

その夜、おじいさんは、夢を見ました。

不思議なことに、おじいさんは、幼い子供
でした。別れ道の真ん中に一本の木が立っ
ていて、その下に黒い服で、銀色の髪をしたお
ばあさんが、すわっていました。

右の道には、おいしそうなキャラメルや、
うずまきあめ、チョコレート、ケーキ、何で
も落ちていました。それが、ずっと見えなく
なる先の方まで続いています。

左の道には、歯ブラシが一本と、ずっと遠
くどこかそつがあるだけでした。

迷っていると、おばあさんは

「好きなほうへ行きなさい」

と低い声で言いました。おじいさんは、右の道へ進みました。

お菓子を拾っては食べ、拾っては食べる。おいしくて、楽しくて、大満足！

何日、歩いたでしょう。
「ズキン」という痛みが、口の中を走りまわった。

はじめは、なんとかがまんしていたのですが、そのうち、痛みがひどくなって、まるで、しんぞうが、口の中にあるみたいにならず、ズキンしてきました。そうなるやうに、道に落ちているものを見ても全然欲しくありません。

もう少し我慢して歩いていくと、ちやうどよいところに、歯医者さんが待っていました。

「うーん、これはひどい。全部抜きましょう」
そういって、残らず、歯を抜いてしまいました。歯医者さんの肩こしに、あのおばあさんの悲しそうな顔が、小さく見えました。

見渡してみると、歯が全部抜けて、くしゃくしゃになった顔の人があちこちで、もごもごごわけのわからない話をしています。

おじいさんは、話もできず、せっかくのいちそうも、食べられません。体に力が入らず、腰もまがってしまいました。

おじいさんは、声にならない声で、泣きました。涙が、ほほをツツと流れてきたときに、目が覚めました。

おじいさんは、はっとしました。

小人がいつていた宝物って……

次の日の朝、おじいさんは、あの銀の小箱を、もう一度見ようと部屋にいきましました。すると、ドアがいきおいよく開いて、中から、泊まっていた孫の一人が飛び出してきました。ぶつかりそうになって、あわてて体を抱きしめなう

「じゅんなんご、おじいちゃん。かってはおじいちゃんのお部屋にはいらって。早く起きなうやっだから、探検してたんだ」

そして、こうふんしたように、赤い顔をしてこういいました。

「ほくね、今日から、歯をきちんとみがこうにするんだ」

おじいさんは、はっとして、それから、まじの顔をじっとみつめました。そして、

「そうかね。えらいね。きつと、いじごが待っているや」

そういって、笑顔でまじの頭をゆっくりとなでました。おじいさんの口から、白い歯がこぼれそうでした。